

# エンカウンター (ENCOUNTER)

第 103 号

平成22年11月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

<http://encounter.agape.gr.jp/>

相沢良一

「黒潮の神学 上巻」(黒潮社)より(6)

## み名を呼び求める者

さいきん、八木重吉の詩と信仰『わが歡びの頌歌は消えず』(いのちのことば社)という本が出ました。私をはじめ八木重吉の詩にふれたのは、昭和25年に刊行された『神を呼ぼう』でした。...

八木重吉は中学校の英語の先生でしたが、1927(昭和2)年10月、結核のため29歳でなくなっております。...

「仕事」というのもよい詩です。「信ずること キリストの名を呼ぶこと 人をゆるし 出来る限り愛すること それを私の一番よい仕事としたい」

わたしたちがほんとうに、主のみ名をお呼びしなければならないのは、死の床においてではないでしょうか。これからも「われは、み名を呼ぶばかりのものにてあり」との信仰生活に、励みたいのです。「主もまた、あなたがたを最後まで堅くささえて、私たちの主イエス・キリストの日に、責められるところのない者にして下さるであろう」(コリント前書1章8節)とあるとおりです。

町田市にある八木重吉の生家は、いま八木重吉資料館になっているそうですから、そのうち一度出かけてみたいと思いました(91.11)

## 大島途上のキリスト

この日、ふたりの弟子が、エルサレムから7マイルばかり離れたエマオという村へ行きながら、このいっさいの出来事について互に語り合っていた。語り合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいて来て、彼らと一緒に歩いて行かれた。しかし、彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった。...

それから、彼らは行こうとしていた村に近づいたが、イエスがなお先へ進み行かれる様子であった。そこで、しいて引きとめて行った、「わたしたちと一緒に泊りください。もう夕暮れになっており、日もはや傾いています」。イエスは、彼らと共に止まるために、家にはいられた。一緒に食卓につかれたとき、パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった。すると、み姿が見えなくなった。

彼らは互に言った、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明かしてくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」。そして、すぐに立ってエルサレムに帰って見ると、11弟子とその仲間が集まっていて、「主は、ほんとうによみがえって、シモンに現われなされた」と言っていた。そこでふたりの者は、途中であったことや、パンをおさきになる様子でイエスだとわかったことなどを話した」(ルカ福音書 24 章 13 - 35 節)

信仰の事実としてしか告白できない主イエスの復活物語を、文学的に叙述するとすれば、かくやあらんとしか思われぬのが、このルカ福音書の終わりに記されている「エマオ途上のキリスト」であったのである。この文学的な美しい物語の中心は、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明かしてくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」であったのである。

わが大島伝道 50 年は、復活の主イエスが「大島途上のキリスト」として、この 50 年間に筆者と共に歩んでくださったという以外のなものでもなかった、と言わざるを得ないのである。 (96.4)

## ガリラヤ湖畔の朝

「さて、群衆が神の言を聞こうとして押し寄せて来たとき、イエスはゲネサレ湖畔に立っておられたが、そこに2艘の小舟が寄せてあるのをごらんになった。漁師たちは、舟からおりて網を洗っていた。その1艘はシモンの舟であったが、イエスはそれに乗り込み、シモンに頼んで岸から少しこぎ出させ、そしてすわって、船の中から群衆にお教えになった。

話がすむと、シモンに「沖へこぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい」と言われた。シモンは答えて言った、「先生、わたしたちは夜通し働きましたが、何も取れませんでした。しかし、お言葉ですから、網を下ろしてみましょう」。そしてそのとおりにしたところ、おびただしい魚の群れが入って、網が破れそうになった。...

すると、イエスがシモンに言われた、「恐れることはない。今からあなたは人間を取る漁師になるのだ」。そこで彼らは舟を陸に引き上げ、いっさいを捨ててイエスに従った」(ルカ福音書5章1-11節)

このルカ福音書第5章の物語は、魚がたくさんとれたことでもなければ、網が破れたことでもなくして、この朝、シモン・ペテロが主イエス・キリストに出会ったという出来事であったのでした。...

この出来事こそ、実に、主イエス・キリストとの出会いであったのであります。このようなシモン・ペテロの主イエス・キリストとの出会いが、のちのヨハネ福音書において「わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた」(ヨハネ1.14)との教会のケリュグマ(宣教)となったのでした。...

わたしたちの生は、主にあっては決して空しくはないのです。駄目ではないのです。主にあっては、幾度でもやり直しができるのです。それが主イエスとの出会いであるのです。

## 第4講 使徒パウロ覚書

### (1) 回心前後

牧師になって44年間、聖書に関するわが関心は、とくに使徒パウロに強く向けられてきたのである。彼は自らを「キリスト・イエスの僕」と称した。僕とは奴隷を意味する。使徒パウロは、主キリスト・イエスに絶対の服従をささげた類稀なる忠節の士であった。

彼はキリキヤの首都タルソで身分の低くないユダヤ人の家に生まれ、そこで育った。彼の生年月日は不明であるが、...彼は主イエスより7, 8歳は年下であろうと推定されている。...

使徒パウロに関する資料としては、彼が諸教会に送った9通の手紙がある。いずれも新約聖書に収められていて、その配列は、ロマ、コリント第1、第2、ガラテヤ、エペソ、ピリピ、コロサイ、テサロニケ第1、第2となっている。これらはいずれもその手紙の量よりして並べられたものであって、書き送られた年代順ではない。...

それとルカの筆になる使徒行伝という文書がある。これは彼の殉教後20年ほどして、紀元80年の半ばごろ書き記されたものであり、この使徒行伝第9章は特に彼の回心物語としてよく知られた箇所である。さらに第16章よりおわりの第28章までは、全部彼の伝道旅行記にあてられている。... 青年時代の彼はユダヤ教の理想に引きつけられ、エルサレムに上り、有名なラビ(教法学者)ガマリエルの門下生となったのである。当時、ガマリエルの門下生は4000人に及んだとも言われている。...

要するに、彼が若き日にユダヤ教に精進したというのは、自己の救いのためであったが、さらには神がイスラエル民族に約束された救いと栄光との望みのためでもあったのである。彼はこの約束の実現のために身をささげたのである。そのために彼は若き日に、教会の迫害者となったのである。...お互い青春時代は、懐かしくもまたいたましい数々の思い出があるはずである。

### ( 3 ) 価値の転換

ダマスコ途上におけるパウロの回心(転心)は「御子を私の内に啓示して下さった」(ガラテヤ書1の16)との一行につきる…。この「御子をわたしの内に啓示して下さった」ということは、要するに主イエス・キリストのことがわかったということである。…

「しかし、わたしにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。わたしは更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、一切のものを損と思っている。」(ピリピ3・6) …

パウロにとっての生の拠りどころはなんであったか。それはエリート階級に属し、宗教的熱情、あるいは品行の方正を意味したのである。このような人間的行為によって神の義を獲得しようとしたのが、若き日のパウロであった…。

しかし、ダマスコ途上において「み子を私の内に啓示して下さった」という信仰経験を通して、彼にとってこれまで生の拠りどころであると思われたものが、無用の長物と化したのである。…

われわれはこの人生において、何を拠りどころにしているだろうか。それは健康であり、財産であり、あるいは知識であり、能力であり、さらには地位であり、名誉であるかもしれない。しかし、主イエス・キリストを知ることが出来るならば、それらのものを損、すなわち無用の長物とまでに思えるようになる。…

お互い自分を見れば嫌になる。愛想が尽きるであろう。しかし、なぜこのような自分が嫌にならないでおれるのか、愛想が尽きないでおれるのか。それは、キリストを仰ぎみる信仰によって「キリストのうちに自分を見いだす」ようにされたからである。罪を赦されている自分をキリストにおいて発見できたからである。…

彼はユダヤ教と律法から決別し、キリスト者の仲間に加えられた。彼の前には広い働きが場所が備えられた。今や彼はキリストの使徒とされたのである。

## (6) アンテオケ教会

「このうわさがエルサレムにある教会に伝わって来たので、教会はバルナバをアンテオケにつかわした。彼は、そこに着いて、神のめぐみを見てよるこび、主に対する信仰を揺るがない心で持ちつづけるようにと、みんなの者を励ました。...そこでバルナバはサウロを探しにタルソへ出かけて行き、彼を見つけたうえ、アンテオケに連れて帰った。ふたりは、まる1年、ともどもに教会で集まりをなし、大勢の人々を教えた。」(使徒行伝 11 の 19 - 26)

このバルナバが、生まれ故郷のタルソに隠棲し、時期の到来を待っていたサウロを、アンテオケ教会の教師として迎え入れる任務を果たしたのである。このアンテオケ教会を拠点として、サウロ、のちのパウロは、世界宣教の第1歩を踏み出すことができたのである。

ほぼ10年にわたるタルソ隠棲中のパウロの消息について、使徒行伝は沈黙しているが、パウロ自身の筆になるコリント後書第12章には、次のように記されている。

「私は誇らざるを得ないので、無益ではあろうが、主のまぼろしと啓示とについて語ろう。わたしはキリストにあるひとりの人を知っている。この人は14年前に第三の天にまで引き上げられた。それが身体のままであったか、わたしは知らない。からだを離れてであったか。わたしは知らない。神がご存知である。パラダイスに引き上げられ、そして口に言い表わせない、人間が語ってはならない言葉を聞いたのを、わたしは知っている。わたしはこういう人について誇ろう。しかし、わたし自身については、自分の弱さ以外に誇ることをすまい」(コリント 12・1 - 10 節参照)

14年前に第三の天にまで引き上げられ、人間が語ってはならない言葉を聞いた、というのは、パウロ自身であったのである。具体的にはそれがどのような神秘的な経験であったかについて、パウロは触れてはいないが、タルソ隠棲中の経験について言及したのは、この個所のみである。

## (7) 第1次伝道旅行

「一同が主に礼拝をささげ、断食をしていると、聖霊が「さあ、バルナバとパウロとを、わたしのために聖別して、彼らに授けておいた仕事に当たらせなさい」と告げた。そこで一同は、断食と祈りとをして、手をふたりの上においた後、出発させた。」(使徒行伝 13.2 - 3)

使徒行伝の記述によれば、バルナバとパウロの二人は、ヨハネ・マルコを助け手として、バルナバの故郷キプロス島にわたり、島を縦断した後、小アジアに向かってパンフリヤのペルガに上陸。ペルガからほぼ一直線に北上してタウルス山脈を越え、アナトリア高原上のピシデヤのアンテオケを訪れる。その後、セバステ街道にそって東進し、イコニウムからルステラ、デルベまで伝道の戦線をのぼす。このデルベから元の道を引き返し、海岸に出て、最後はアタリヤから乗船して、海路アンテオケに戻る。この間、パウロはキプロス島のパポスで、魔術師バルイエスの妨害に勝ち、島の総督セルギオ・パウロが信仰に導かれる。この時点よりパウロは、正式にパウロと呼ばれるようになる。

バルナバ、パウロ、従者のヨハネ・マルコの3人は、キプロス島より船出し、パンフリヤのペルガに上陸したものの、ここで、マルコはエルサレムに帰る。前途に予測される伝道の困難に耐えかねたものと思われる。...

いずれにしても、バルナバとパウロによりこの第1次伝道旅行の全行程は、1100キロに及び、そのほとんどはいずれも険しい山道であり、岬々たる小アジアの山脈が彼らの進路をはばんだことは想像に難くはない。1100キロと言えば、ほぼ東京 京都間の往復に当る。この第1次伝道旅行の成果として誕生した数個の教会が、いわゆるガラテヤの諸教会であり、のちにパウロがこの教会にあてた「ガラテヤ人への手紙」が、後の宗教改革文書として、いまもなお燦然たる光茫を放っているのである。

## (12) マケドニア人の叫び

いよいよ使徒パウロの第2次伝道旅行に入る。使徒行伝第15章によれば、次のとおりである。

「パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。そしてパウロは、シリア、キリキヤの地方をとおって、諸教会を力づけた。それからデルベに行き、次にルステラに行った。そこにテモテという弟子がいた。信者のユダヤ婦人を母とし、ギリシヤ人を父としており、ルステラとイコニオムの兄弟たちの間で、評判のよい人物あった。パウロはこのテモテを連れて行きたかったので、その地方にいるユダヤ人の手前、まず彼に割礼を受けさせた。彼の父がギリシヤ人であることは、みんな知っていたからである。」(使徒行伝 15・40 16・5) ...

「ここ(トロアス)で夜、パウロは一つの幻を見た。ひとりのマケドニア人が立って、「マケドニアに渡ってきて、わたしたちを助けてください」と、彼に懇願するのであった。パウロがこの幻を見た時、これは彼らに福音を伝えるために神がわたしたちをお招きになったのだと確信して、わたしたちはただちにマケドニアに渡って行くことにした(使徒行伝 16の6-10)」

ここで、突如として「わたしたち」ということばが出てくる。この「わたしたち」ということばは、このあと使徒行伝の終わる第28章までに、4回使われているのである。「わたしたち」とあるからには、このトロアスにおいて、著者のルカがパウロの一行に加わったわけであるが、どういう理由であるかは分からない。ルカはギリシヤ人で医者であった。...

この「マケドニア人の叫び」に答えるために、パウロの一行はただちにトロアスから舟出をし、ヘレスポント海峡を渡り、3日目には早くもマケドニアの首都ピリピに達したのである。このようにして福音はゆくりなくも、アジアからマケドニア、ギリシヤの世界にもたらされたのである。教会の歴史に転機を画したこの出来事の発端となったのは、第2次伝道旅行の途次、パウロがトロアスで示されたこのような「幻」によったのである。

### (13) ピリピの伝道

「そこで、わたしたちはトロアスから船出して、サモトラケに直航し、翌日ネアポリスに着いた。そこからピリピへ行った。これはマケドニアのこの地方第1の町で、植民都市であった。わたしたちはこの町に数日間滞在した。ある安息日に、わたしたちは町の門を出て、祈り場があると思って、川のほとりに行った。そしてそこにすわり、集まってきた婦人たちに話をした。

ところが、テアテラ市の紫布の証人で、神を敬うルデヤという婦人が聞いていた。主は彼女の心を開いて、パウロの語ることに耳を傾けさせた。そして、この婦人もその家族も、共にバプテスマを受けたが、その時、彼女は「もし、わたしたちを主を信じる者とお思いでしたら、どうぞ、わたしの家にきて泊ってください」と懇望し、しいてわたしたちをつれていった」(使徒行伝 16 の 11 - 15)

アレキサンダー大王の父ピリポスにその名を負い、ローマの植民地たる特権を得た「この地方第1の町」とよばれたピリピには、ユダヤ人の会堂(シナゴグ)がなかったので、パウロはガンギデス河のほとりで説教を試み、ここを足場として福音を延べ伝えたのである。最初に救われたのは「テアテラ市の紫布の商人で、神を敬うルデヤという婦人であった」とある。ルデヤが救われたのは、パウロの説教に耳を傾けたからである。このことを著者ルカは「主は彼女の心を開いて、パウロの語ることに耳を傾けさせた」と記した。

ここに、説教の本質と課題が存するのではないか。聞く者の心を開くのは、語る者の雄弁とか学識とか説得力ではなくして、聖霊のはたらきによる以外にはないのである。...

神の信任を受け、福音を託された者としてのわれわれは、主イエス・キリストの十字架についての印象を語ったり、感想を述べているのではない。じつに「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救いにあずかるわたしたちには、神の力である」(第1コリント1の18)との確信に立っているのである。

## (14) 閑話休題

ピリピ教会は、のちになって、ロマに捕われの身となっているパウロの身の廻りの世話をさせるために、エパフロデトを派遣したのである。ところが、彼は任半ばにして大病にかかってしまった。病い癒え、帰心矢の如き彼に託したのが、ピリピ書であった。このエパフロデトについて、パウロは次のように述べる。

「しかし、さしあたり、私の同労者で戦友である兄弟、また、あなたがたの使者として私の窮乏を補ってくれたエパフロデトを、あなたがたのもとに送りだすことが必要だと思っている。彼は、あなたがた一同にしきりに会いたがっているからである。その上、自分の病気のことがあなたがたに聞えたので、彼は心苦しく思っている。彼は、実に、ひん死の病気にかかったが、神は彼をあわれんで下さった。...

こう言うわけだから、大いに喜んで、主にあつて彼を迎えてほしい。また、こうした人々は尊重せねばならない。彼は、私に対してあなたがたが奉仕のできなかつた分を補おうとして、キリストのわざのために命をかけ、死ぬばかりになったのである」(ピリピ書 2 の 25 - 31) ...

エパフロデトは、せっかくパウロの身辺の世話をするために、ピリピ教会より派遣されたにもかかわらず「ひん死の病気にかかった」のである。しかも、その病気のことがピリピ教会に伝えられ、彼は面目を失した思いの中で、病の回復と共に、パウロに暇乞いを願ったのである。パウロはこのエパフロデトを一日も早くピリピ教会に送り返した方が、むしろ彼のためになるとの判断に達したのであった。ただ、その際、彼が肩身の狭い思いをしないようにとの配慮を持って「彼は私に対してあなたがたが奉仕のできなかつた分を補おうとして、キリストのわざのために、命をかけ、死ぬばかりになったのである」と、彼にこのような讃辞を呈したのではなかったのか。このパウロの優しさを、筆者などは今からでも大いに学び直す必要を感じているのである。...いま「尊重せねばならない」のは、どの教会にもおられる高齢者の方々ではないか。